

日本での思い出とキャリア形成

—ペルーの若手クリエイター6人の抱負とアイデンティティ—

国際学部 スエヨシ アナ

1990年代初頭、国際的な商業・金融市場の自由化が進み、グローバル化が加速する中で、国内では得られない労働力を必要とする日本の工場働くために、日系ペルー人が日本に出稼ぎに来るという現象が生じた。出稼ぎ現象は、日本でこのような労働力不足に対応したもので、当初は家族、特に妻や子どもを母国に残した人々が集まった。やがて連鎖的な移住が起こり、核家族化、拡大家族化がペルー人出稼ぎ労働者の1つとなった。しかし、様々な理由によってペルーに戻ることになる。その理由としては、家族の病気、希望する貯蓄を十分に満たしたこと、子どもが日本に適応できず学校の成績が悪かったこと、ペルーの教育や文化を好んだこと、他の受け入れ社会を探したことなどが挙げられる。

このような日本とペルーの間の移動は、1990年代から定期的に起こっていたことは事実だが、2000年代後半に、その傾向が強まった。その理由としては、長期にわたる日本の経済危機が考えられるが、他方、ペルーでは長期にわたって持続してきた経済改善の兆しも見られ、それに2008年の金融危機が決定要因として加わった。2008年3月と2009年8月から9月にかけて、日本からペルーに帰国した児童・生徒を対象に、帰国後の個人、学校、社会への適応度を明らかにすることを目的とした調査を実施した。その際、ペルー海岸沿いのリマ市とチクラヨ市で167人の小中学生にインタビューを行った。

このうちショートフィルム制作に携わる映像クリエイターが2人、グラフィック・デザイナーが2人、それからデジタル・イラストレーターが1

人、もう1人はコミックに携わっている。神奈川に2人、大阪に2人、その他は群馬と広島に在住した。共通点としては、一人を除いてほとんどが、一家の主が日本で出稼ぎをしていた家庭の出身であることが挙げられる。同様に、彼らのほとんどはペルーに帰国後、ラ・ビクトリアやラ・ウニオンといった日系人学校、あるいはエイブラハム・リンカーン・スクールのような日系人生徒が多く在籍する高校を卒業した。質の高い高等教育を修了し、その多くがすでに大学院に進学している、あるいはその予定がある若い芸術家たちに見られるもうひとつの共通点は、ペルーに帰国したにもかかわらず、父親や母親が日本に残って働いていた、あるいはどちらかが別の移住先を探していたりして、家族の断絶という悲しい経験をしていることである。

上述の調査結果の15年後、本稿を通じて、幼少期、青年期、成人期に数年間日本で暮らした後、日本から帰国した6人のクリエイターにインタビューを行い、日本での経験がそれぞれの作品にどのように反映されているかを明らかにすることを目的とした。彼ら全員が日系ペルー人であるのは、本研究が日系ペルー人に限定されているからではなく、日系ペルー文化センターでペルー日系人協会が毎年開催している「日系若手アート展」にも出展しているからである。彼らのほとんどはリマ出身だが、チクラヨ県出身の若手クリエイターは1人で、専門分野、日本での生活経験、日本での地理的な分布など、サンプルは非常に多様である。20代後半から30代後半にかけての若者たちは皆、日本での人生経験やその回想だけでなく、日系

コミュニティーの中で展開される、日系人とペルー人、あるいは日系人、ペルー人、沖縄人など、二重、あるいは多重のアイデンティティについて考察しながら、作品を制作している。ある者は、ペルー人であることと日系人であることのバランスを明確にしようとし、またある者は、自分たちが維持している日本とのつながりが、日系人であることを通さないものであることに疑問を投げかけ、またある者は、民族や帰属の要素を超越した普遍的な日系人としての在り方に行きついている。

大城 比嘉 成美 クリスティーナ



写真1 大城 比嘉 成美 クリスティーナ
Narumi Cristina Ogusuku Higa

1996年、日本群馬県桐生市生まれ。2008年、桐生市立天沼小学校を卒業。母親とペルーへ帰国し、2009年にリマ市ラ・ビクトリア学校に編入。2013年高校を卒業後、2014年ペルーポンティフィシア・カトリック大学コミュニケーション科学部視聴覚コミュニケーション学科に入学。卒業後、2020年ソフトウェア企業で勤め、その後同大学入試課で入試に関するビデオとSNSコンテンツの担当。2022年からペルーリマ市国際協力機構（JICA）勤務。

2022年 ペルー日系人協会主催『第6回日系若手アート展』に「ユビキュア（Ubicua）」展示。

大城さんによると、「この作品（写真2）では、いわゆるデカセギ2世として日本で生まれ育ち、その後全く知らない国であったペルーで過ごした中で感じたアイデンティティの葛藤について自分が過ごしてきた両国の風景と交えて語っている、自伝的作品です。

ユビキタスとは「いつでもどこでも存在する」という意味です。今まで日本で、ペルー

で、そして日系社会でも多くの人に聞かれてきた「どこの人なの？」という質問に対し、ペルーでもあり、日本でもあり、どちらか一つではないこと、そして時間と共に変化しながらも自分の「居場所」は様々なところに存在すること、それがその質問への答えであり、今までの葛藤に対する自分自身への答えであるとも思っており、まさにこの言葉がそれを表しているのではないかと思います。」



写真2 ショートフィルム「ユビキュア（Ubicua）」2022
大城 比嘉 成美 クリスティーナ

日本生まれ育ちであることによって、ユビキュアという作品に与えた影響、そして、ペルーにおける日系人社会へ伝えおきたいことについて、聞かれると、下記の通り話した。

「ペルーの中での日系コミュニティーの、えっと、ほとんどの人がペルーで生まれ育って、ペルーの社会の中で生きてきた日系人の人がほとんどで。こう、日系のアイデンティティについて語る中でも、こう、ほとんどが自分の先祖への敬意であったりとか、自分のルーツに、への繋がりが来る、えっと、日系人というアイデンティティっていうものを持っている人の方が多いのではないのかなと思う中で、たとえば、自分の場合だったら、えっと、自分のルーツ元ではあるけど、自分が日本に住んでいたことによってできた、えっと、日本との繋がりがあるからっていう意味でのアイデンティティっていうものもあると思って。それも違う一つの、うーん、まあ違うけれども、それも日

系のアイデンティティの一つではあると思っ
て。けど、それについて、えっと、当事者か
ら話すっていうことであったりとか、この、そ
の日系という歴史の中で、まあ在日ペルー人・
在日日系人がいて、こういう経験をしてきて、
こういう行ったり帰ったりを繰り返してきた
っていうことがまだあまり、こう、出稼ぎに
ついては話されていても、その後起きた、そ
の、子どもたちのことであったりとかって
いうのは、まだあまり、こう、共有されて
いないのかなと、日系社会の中で生きて
いて感じてきたので、あの、自分は、日
系社会の中に、中心にいる一人として参
加してくださいって言われた時に、一番に
思い付いたことがそれだったんですね。私
は日系社会の中心にいなながらも、普段は
わからないかもしれないけど、たとえば自
分は日本に住んでいたって話をすると、こ
う、ああじゃあ、あっちの人なんだねっ
ていう、その、違う場所の人として認識さ
れるようになるということが度々あったん
ですね。その日本語が話せるとか、日本に
住んだことがあるから、ああじゃああち
の人なんだっていう見方を瞬時にされるっ
ていう、あの、瞬間もあったんですね。だ
から、同じ日系人でもあっちの人こっち
の人ってような見方があったりして。そ
ういうアイデンティティは、こう、日系社
会の中で、こう、見えていないようでも
色々なアイデンティティの感じ方があっ
て、それで良いっていう、あの、ことにつ
いて、あの、話せたらいいのかなと思っ
て、この作品を作りました。」

中崎 イェスケン 秀樹 ロベルト

中崎さんは、自分のアイデンティティにつ
いて、下記の通り話した。「祖母はユダヤ
人だし、日本に住んだこともあるし、チク
ラヨ出身でもある。

日本から帰ってきたとき、日本人であるこ

とをより強く感じたが、日本では日本人では
なかった。でも、世界に対する見方、環境
や人生に対する関わり方、すべてが幼少期
の日本での生活から生まれたものであるこ
とは否定できない。結局はそういうこと
なんだ。そういうふりをするのではなく、
そういうものなんだ。芸術を通して自分
自身を探し求めているんだ。」



写真3 中崎 イェスケン 秀樹 ロベルト
Hideki Roberto Nakazaki Yesquén

1991年ペルーチクラヨ市生まれ、2000年
に来日し、広島県広島市海田町小学校4年
生に編入。年海田町立海田中学卒業後、
2006年に母親・兄弟とペルーチクラヨ
市へ帰国し、マヌエル・パルド私立学校
編入、2008年度高校卒業。2009年、
ペルーサント・トリビオ・デ・モグロ
ベホ大学（USAT）法学部入学し、1年
後に中退。2010年同大学人文学部コ
ミュニケーション学科展部、2015年卒
業。2018年、キューバハバ市サン・
アントニオ・デ・ロス・バニョス国際
テレビ映画学校（EICTV）フィクシ
ョン監督専攻入学、2022年卒業。
2023年スペイン国際ラ・リオハ大
学脚本・シナリオライター修士プロ
グラム入学。

2023年ペルー日系人協会主催『第7
回日系若手アート展』に「ちかおの
日記（Diario de Chikao）」展示。

「先祖に価値を与え、彼らの歴史を
記念すると同時に、自分自身を知り、
自分のコミュニティや世界に歴史を
伝えることで、ある程度までは語
られなかった、あるいは知られて
いなかったある事実が知られるよ
うになる。

ペルーや世界の一部でもある自
分の物語を共有することは、日
系人として大きな満足感を与
えてくれる。このことは、映画
を作り続け、アートに身を捧げ
続けるモチベーションになって、
私の遺産を伝えることに満足
感だ。」



写真4 ショートフィルム「二つの島の間に(Entre dos islas)」2018
中崎 イェスケン 秀樹 ロベルト

大学在学中から、前世紀初頭にチクラヨに定住した日本人移民である曾祖父の記憶を取り戻すことに関心を示し、「ちかおの日記(Diario de Chikao)」(写真3)と題した視聴覚作品に収めている。キューバ留学中に撮影した短編映画「二つの島の間に(Entre dos Islas)」(写真4)では、母親がキューバ人、父親が日本人の少女のカリブ海の島での生活を描いている。この短編を観た私たちは、キューバよりも日本の方にチャンスがあるのではないかと想像する。しかし、その少女は、父親の来日のリクエストに対してずっと断り続けている。また、リマ地方ワラル県で戦前に日系人家族が撮影した映像のデジタル化と普及を通じた保存の共同作業も行っている。

「第7回日系若手アート展」では、この時代の映像にモンタージュと音を用いて独自の意味を持たせ、リサーチを深める機会を得た。同時に、彼の曾祖父の日記から抜粋することで、物語を構築し、過去を現在に視覚的に取り込み、日系人や「第7回日系若手アート展」に参加したすべての人々と共有することが可能になった。

彼は現在、中川写真館のフィルムと写真のアーカイブを受け継ぎ、それを再構築し、保存し、広めることを目的とした短編映画を制作する最終段階にある。中川写真館はチクラヨ市で戦前から長い歴史を持ち、そのアーカイブには

中川氏がペルーからアメリカに強制送還され、同国の収容所に収監された際の個人的な資料も含まれている。このように、中川家の施設は、地元の日系および非日系のコミュニティにとって写真館としての役割を果たしており、そのフィルムと写真のアーカイブの救出は、地元や国内だけでなく、国際的にも興味深いものである。これらの歴史的資料と新たな資料を加え、彼は短編映画『中川政夫の光』を制作し、未発表の歴史的資料を含む長編映画の制作も計画している。

これらの作品はすべて、2018年にペルー文化省から最初の経済支援を受けて以来、昨年まで、長編映画プロジェクト、視聴覚研修、新しい視聴覚メディア、長編ドキュメンタリー、メキシコの仲間との共同制作など、さまざまなカテゴリーで7つの機会に恵まれた。現在、アメリカ・テキサス州クリスタルシティの収容所で生まれた大山良雄さんの半生を題材にしたドキュメンタリー映画を編集中である。

ペレス・ロバイ・キミコ

自分のアイデンティティについて、下記の通り、述べている。「私のアイデンティティは日本との直接的なつながりであって、日系コミュニティとのつながりではない。日本を離れると、私は日系コミュニティとペルー人コミュニティの一員になる。日系コミュニティは戦前の想像の中で生きていて、彼らは戦前の価値観や固定観念の中で育ってきた。日本は戦前と戦後の国として存在し、国は進化し、価値観は進化し、問題は進化してきた。なぜなら、自分のルーツを守りたいけれど、時にはそのルーツがなじまないこともあるからだ。それが私の帰属意識であり、同じように感じられないからだ。しかし、あなたはスペースを見つけ、日系人であること、そしてその日系人であることをどう生きるかというアイデンティティが変異していることに気づく。」



写真5 ベレス・ロバイ・キミコ
Kimiko Pérez Rovai

1997年ペルーリマ市生まれ。2000年来日し、2003年大阪府寝屋川市楠根小学校入学。卒業後、2008年に母親・兄弟と一緒にペルーリマ市に帰国。ラ・ユニオン学校に編入し、2013年に同学校卒業。2014年にリマ市ピウラ私立大学経済経営学部サービス経営学科入学し、3年後中退。2017年からコリエンテ・アルテナ大学現代視覚芸術入学。

2023年ペルー日系人協会主催『第7回日系若手アート展』に「自分のアイデンティティ:ファミリーヒストリー (Crónicas de mi identidad)」展示。

「大阪はとても大きな文化の中心地だし、京都に行くのも簡単だったから、週末にはいつも日本を訪れていた」という。ペルーに戻ってからも、ベレスさんは常に美術と音楽の分野で優秀だった。現在、絵画、彫刻、デッサン、批評、経営の教育を受けている。あらゆることを学び、最後の2年間は卒論研究で、どのような素材を使って、どのようなテーマで、何に打ち込みたいかを明確にした。彼女は、文化経営、芸術作品の制作により深く関わり、女性問題に取り組んでいる。彼女は、社会における女性の立場について強い批判をするために研究をしている。卒業論文では、いつもヨーロッパ中心で語られる美術史を取り上げ、そこから批判を始めた。「私のテーマは、アジアやラテンアメリカにおける女性たちの先祖代々の歴史をよみがえらせながら、歴史の中で女性の役割や空間に着目することだ。」という。

APJの作品の場合、「私が日系コミュニティの一員であることから招待されているが、招待されたとき、私は何を言いたいのが見つけるのに時間がかかった。」という。



写真6 写真と油絵「中華街 (Chinatown)」2019
ベレス・ロバイ・キミコ

「私は母の実家で育ち、父は日系人だ。母親はノルテ・チコというペルーの沿岸部出身で、彼らは異なる文化を持っており、11才のときからその環境の中で育ってきた。「第7回日系若手アート展」というプロジェクトでは、彼女がその環境の中で自分自身をどのように考えているかを理解することが難しかった。この作品は、家族の中で初めて日系人ではないペルー人と結婚した祖母だった。その家族と歴史的な想像を表現するために、彼は祖母の唯一の写真を使っている。私は、日系集団の人々が持っているようなお爺ちゃんやお婆ちゃんのアルバムを持っていないので、感情的な部分として、自分のアイデンティティの内省に着手した。祖母は日本人で、私は混血なので、遺伝的には違うのだが、祖母と私はとてもよく似ている。いつも祖母の話がされるけど、私は祖母を知らないし、祖母が亡くなった時、父親は2歳だった。彼女の個人的な歴史、日系コミュニティ、彼女のアイデンティティやルーツについて、未知の傷を癒すようなものだ。」彼女がその一員であるというわけではないが、彼女の個人的な歴史

ゆえに、彼女は自分がどこから来て、誰であり、誰になりうるのかを知りたいと思う。それは感謝とアイデンティティへの賛辞であり、自分よりも大きなものの一部であることへの賛辞なのだ。

我謝・比嘉・ジャンパオロ・マサキ



写真7 我謝・比嘉・ジャンパオロ・マサキ
Masaki Gianpaolo Gaja Higa

1984年ペルーリマ市生まれ。1990年に来日し、神奈川県座間市立座間小学校入学。1年後、同県西鶴間小学校編入、卒業後1996年両親・兄弟と一緒にペルーリマ市へ帰国した。1997年にラ・ウニオン学校編入、卒業後2002年リマ市ツールーズ・ロートレックアート専門学校グラフィックデザインコース入学。2003年経済的な理由で、中退し、出稼ぎとしてまた来日。2007年ペルーへ帰国、同アート専門学校に復帰、2008年卒業。ペルー国内国外イラストレーターとして、フリーランスで働き、2015年からペルーリマ市化粧品メーカーペルコープ商品パッケージングデザイナーとして勤務。

2022年ペルー日系人協会主催『第6回日系若手アート展』に「kodomonokoro.jp kikoku.pe Jpn.pe (Infancia.jp Regreso.pe Jpn.pe)」展示。

美術との出会いは、小学校で漢字を書いたときで、スペースをうまく使って書いた作品が展覧会に出品された。その後、友人たちが漫画を描き、彼はそれに憧れ、真似をした。その時期は、学業、市民生活、精神面、栄養面、そのすべてが我謝さんの成長に役立ち、とても充実していた。

時間割の問題、時間通りに到着すること、物事に従うこと、自分と同じ能力を持たない人への敬意、共感、優越感を感じようとしないうこと、公平性と一体感、尊敬すべき上司の存在。

ペルーに戻ったとき、彼は自分には違う個性があることに気づいた。言葉や技術だけでなく、仕事をするたびに気づくことがあった。」という。

「日本はとても感覚的で、匂い、光、音、すべてが違う。日本はとても感覚的で、匂い、光、音、何もかもが違うんだ。私を受け入れてくれ、資金を提供してくれ、無償で教育してくれ、食事を与えてくれた日本に感謝することがたくさんある。



写真8 3Dデジタルイラスト「kikoku.pe (Retorno.pe)」2022
我謝・比嘉・ジャンパオロ

ペルーに戻ったとき、自分には違う個性があることに気づいた。言葉や技術だけでなく、仕事をするたびに気づくことがあった。

そのおかげで、社会に適応することができた。間違いなく、この経験は、私が家庭の問題から抜け出し、ペルーでプロになるための勉強の資金を調達するのに役立った。」

「アートへの興味は、12~13歳の頃、スケートボードを通して生まれた。ボードには波の絵やデザインが描かれていて、私はとてもグラフィックだった。そこからビジュアル・アートへの興味が生まれたんだ。スケートボードのブランドはどれもよくできていて、すべてがつながっていた。スケートボードは、デザインとカ

ラフなボロシャツが私のアイデンティティの一部だったからだ。タイポグラフィ、ブランディングからパッケージング、政治家へのメッセージまで、誰もが長い時間をかけて築き上げたスタイルを持っている。

これが私のやりたいことであり、スタンダードであり、ビフォーアフターである。私は、歌舞伎とインカの2つの顔を持つ新年のポスターを初めて制作し、そのイラストをインターネットにアップしたところ、とても評判がよかった。イラストレーターとしての位置づけとは別に、収入を得ること、クライアントを持つこと、そしてそれらの企業の興味を引くことが目的だったが、彼らの要求に従って仕事をした。」

「私は、第六回日経国際サロンに参加したが、背景を重視しないようにするためには、少ない方がいいこともある。私は、彼がその時の作品に使った、まさに日本とペルーの国旗の色であるこの2色がとても印象に残っている。根拠を持つことが必要であり、そこには自発性があるが、説明、それぞれの細部に理由がある。漢字とそのさまざまな筆跡のように、彼はさまざまなパーツを用いて構築し、そこにひとつの図形と意味があり、そのエッセンスがある。それが基本的な私のスタイルです。以前は2Dのツールを使っていましたが、3Dに移行したのは、ボリュームや素材、感覚的な部分を扱うことができ、メッセージを補完し、強化するのに役立つからです。」という。

伊藤・モロチェ・晃満

2009年にインタビューした16歳のときから、伊藤さんはすでに漫画家になることを考えていた。

現在自分で漫画を作るのではなく、身につけた漫画の創作プロセスに関する知識を分かち合うのはどうだろう、ペルーに限定することなく、日本の知識や文化をラテンアメリカの人々

に広めるのはどうだろう。そのアイデアは、日本の漫画の要素を広めることである。

日本における漫画の成功に関して、大きな産業として機能するための最適な方法を見つけたことである。つまり、芸術的な側面に焦点を当ててではなく、日本で大衆的な現象となっている理由に焦点を当てることである。



写真9 伊藤・モロチェ・晃満
Akimitsu Ito Moloche

1992年ペルーリマ市生まれ。翻訳・通訳者としての父親の仕事のため1994年に来日し、神奈川県小田原市在住。1997年ペルーへ帰国、1998年ラ・ウニオン学校編入、卒業後2010年リマ市トゥールーズ・ロートレックアート専門学校グラフィックデザインコース入学し、1年後、2011年ラテンアメリカ科学芸術大学（UCAL）編入、2016年卒業。2017年から大学・専門学校で漫画についてワークショップ担当。2022年、海外日系人協会により国際日系デー（6月20日）のロゴコンテストで作品が選ばれた。同年から在ペルー日本大使館SNSでPR担当。

2023年ペルー日系人協会主催『第7回日系若手アート展』に「超越する（Transcender）」展示。

伊藤さんの漫画のテーマは、バラエティに富んでおり、特定の路線を持っているわけではない。彼は、日本でよく行われている、伝統的な物語を取り上げ、彼独自の方法でそれを語るといようなことに多くを頼ってきた。2022年の「サン・マルティンの夢」で彼がやったことは、基本的に、サン・マルティンの夢を彼独自の方法で描くことである。アメコミのようなショットではなく、日本では映画のように連続して行われる。日本以外の国では、芸術的で過剰に展開された、しかし静的な作画が強調され

る傾向があり、感情に焦点を当てるのではなく、事実に焦点を当てることが多い。日本のアニメには、海外ではあまり見られない、共感力を生み出す発想力がある。



写真10 漫画「サン・マルティンの夢(El Sueño de San Martín)」2021
伊藤・モロチェ・見満

高校でも日本の漫画のワークショップがあるというが、彼は漫画をスタイルとして教えることに反対で、デッサンに重点を置いている。そのため、彼はワークショップを差別化し、創作プロセスや創作の基準、表現のコツやヒントについてより多く教えようとしている。伊藤さんは、「漫画」という言葉をあまり使わない。人々は、「漫画」をグラフィックスタイルとして混同しているからだ。

彼が「第7回日系若手アート展」に参加したのは、日系人であることを共有する良い機会だった。彼にとって、日系人であることは常に問題だった。ニホンゴを知らなければならない、苗字がなければならない、顔がなければならない、

100年以上前の移民の子孫でなければならないか、よくわからなかった。

伊藤さんによると「「第7回日系若手アート展」で、私はその考えを表現しようと思いました。日系人であるということは、他の民族、他の文化、他の国の子孫と何の違いもないようなものであり、日系人であることに意味があるとすれば、それは、先祖の努力に感謝し、先祖と同じように歴史を作り続けるという精神的な側面である「ありがたみ」なのです。コミュニティの努力に感謝することです。集団に属すること以上に、それこそが重要なことなのです。それこそが重要なのです。」

彼が「第7回日系若手アート展」で発表した作品は、日系人という枠にとらわれることなく、一人の人間の人生をアニメーションで表現したものである。

日系人という枠を超え、お爺ちゃんから発せられる言葉なきメッセージは、祖父母や両親と同じ物語を同じ理念で繰り返す。平行して、彼はもう一つのスクリーンを提示し、そこで彼の家族の写真を見ることができた。この2つの画面は並行して映し出され、同時に流れる2つの映像をつなぐ役割を果たす共通の音楽で繋がっていた。アニメーションのストーリーは車から始まり、車で終わる。それはまるでつながりのサイクルのようで、彼の父親と彼に起こることなのだ。それこそが日系であり、歴史であり、繰り返される過去であり、私たちが繰り返し続けることなのです。

この作品の意図は、日系人でない人たちにもメッセージを感じてもらうことだ。伊藤さんは、日系人であることが、祖先について多くのことを考えさせるといふ。それは、祖先や両親の経験によってすでに形成されている自分のアイデンティティとはあまり関係がなく、媒介物であると考えるからだ。

宮城・中本・アドリアナ

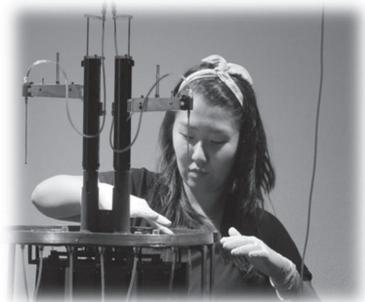


写真11 宮城・中本・アドリアナ
Adriana Miyagusuku Nakamoto

1995年日本大阪府大阪市生まれ。すぐに両親・兄弟と一緒にペルーへ帰国した。1998年に来日し、1年後渡米し、カリフォルニア州ロサンゼルス、ネバダ州ラスベガスに在住。2005年、スペインマドリッド市へ移動。2008年ペルーリマ市帰国。リマ市エイブラハム・リンカーン私立学校編入、2011年卒業。2012年ペルーポンティフィシア・カトリック大学アートデザイン学部彫刻学科入学、2019年卒業後、個人的・グループで展示。2022年リマ市アリアンスフランセーズの開催コンクール「芸術家のためパスポート」の受賞で、フランスパリ市3ヶ月国際芸術都市研修。2022年オランダアムステルダム市ゲリット・リートフェルトアカデミー（美術大学）サンドベルグ・インスティテュートの美術大学院入学。

2019年ペルー日系人協会主催『第3回日系若手アート展』に「共存 (Symbiosis)」展示。

宮城さんの芸術への傾倒は、すでにペルーにいたころの学校で生まれた。国際バカロレアを修了した彼女は、芸術とある種の科学への傾倒を常に持っていたため、選択することができた。大学での最後の2年間は、日系や日本のことは何もやりたくなかったという。自分が日系人だからといって、必ずしもそのテーマに結びつけなければならないクリエイターにはなりたくなかったからだ、と彼女ははっきりと覚えている。というのも、日本から持ち込まれた、あるいは日本から送られてきた写真だからだ。「私にとって、その写真にはそれ以外の意味はなく、私はその写真に日系人としてのアイデンティティを感じていなかった。」という。

大学卒業後、彼女はキネティック・インスタレーションやサウンド・スカルプチャーと呼ばれる彫刻作品を制作している。彼女は機械に魅

了され、機械との関係、生命を感じさせる動きやアニメーション化された機械に魅了された。

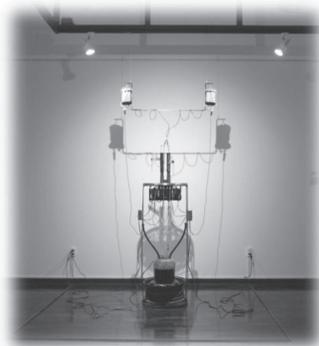


写真12 サウンド・アート「共存 (Symbiosis)」2019
宮城・中本・アドリアナ

自分が感じていることを反映しない身体に自分を感じることは、まるで誤導のようで、自分が何かであるかのように思わせたり、思わせたりするが、実際には別の何かなのだ。宮城さんにとって機械との関係はそのようなものであり、身体の実在性のようなものだ。しかし、彼女が直面する世界観は、このような身体と心が分裂した西洋的なものではなく、すべてのものの中に生命があるという神道のようなものだ。機械の中にも、物の中にも、彼女は生命を見出す。そこには一種の葛藤があり、それが彼女を特徴づけている。彫刻的なオブジェに魅了され、芸術の中でオブジェと対峙することで、おそらく人は自分自身を映し出すことができる。

第3回日系若手アート展でも、彼女は物質性に関する彫刻を制作した。彼女にとって、テクノロジーとの関係はそのようなもので、それは私たちのすべてを捉えているわけではなく、私はこれらの彫刻を、測定されている身体の現れ、ある種の生物学的な反映があると見ている。

「日系人であることがすでに奇妙なことであるなら、私たちは日常的な主観性の一部としてこの2つの文化を持っているという意味で、私は他の日系人と同じ集団的関連性を持たない日

系人である」、しかし彼女は、自分が何であるかという文化と結びついていない別の場所にいる今、日本文化との関係よりも、ペルー人、あるいは日系人に刻まれているペルー人としてのアイデンティティの方をより強く感じていることに気づいた。オランダにいる今、彼女はそれをさらにはっきりと感じている。彼女が最も恋しいと思うものをペルーに結びつけることができ、リマ市に結びつけることができる。ペルー沖縄県人会（旧Asociación Fraternal Okinawense-AFO/新Asociación Okinawense del Perú-AOP）は、彼女がずっと立ち止まり、貢献し、活動をしてきた場所だからだ。だから彼女はすでに、ペルー沖縄県人会の仲間たちと長い時間をかけて作り上げた集合的な記憶に自分が属していると感じている。

終わり

インタビューに応じた6人のアーティストたちは、必然的にペルーの日系コミュニティに対する自分のアイデンティティを問い直し、考え直すことになる。まず、キミコ・ペレスさんは、日本での生活経験から、日本と直接のつながりを築くことができなかった。

一方、大城成美さん、伊藤晃満さん、宮城アドリアナさんは、現在の職業柄、APJやAFOなど、ペルーの日系コミュニティの中心メンバーと接触している。しかし、積極的に関わっているにもかかわらず、3人の立場は異なる。大城

さんは「日系人の一部と見られている」というが、実は自分自身は日系コミュニティとは別の人間であり、それを作品「ユビキュア」で伝えたかったのである。日系人であることに意味があるとすれば、それはありがたみであり、先祖の努力に感謝し、認め、彼らのように歴史を作り続けるという精神的な側面である。このように、伊藤さんの作品「超越」は、日系人であることだけにとらわれず、過去も文化も理念もすべて超越した人間の生き様を描いたアニメーションである。宮城さんは、家族や仕事でのつながり、そして日系人の外見を通して、日系人や沖縄のコミュニティと親密であるにもかかわらず、対話者を混乱させるかもしれないと考えている。観客を混乱させる可能性のある機械、実際には生きていない無生物を使うことで、彼女は作品を通してこのことを明確に表現している。

我謝マサキさんのように、日本との直接的な関係を維持し、日本が与えてくれたもの全てに感謝の念を絶やさない日系人クリエイターもいる。彼は、良い教育、市民の社会教育、栄養など日本の滞在中経験したことを自己基盤にした。

最後に、共有しペルーにおける日系人社会、特にチクラヨ市の日系人社会に貢献したいと願う中崎秀樹さんの映画作品は、それを通して自身のアイデンティティを確認し、自身の持つ他の民族的・文化的要素へと拡張している。